

地下の正倉院展

平城宮跡資料館

秋期企画展

コトバと木簡



2011年10月18日

発行
独立行政法人 国立文化財機構
奈良文化財研究所

〒630-8577 奈良市二条町 2-9-1
<http://www.nabunken.jp/>

ごあいさつ

木簡は、コトバを持った発掘遺物です。遺跡に、コトバを与えてくれます。

では、古代の人々ほどのように木簡にコトバを託したのでしょうか。漢字という異文化の文字を使いこなす工夫や、文字の書き記し方にみえる漢字への習熟など、木簡には万葉びとがコトバを文字で表そうとした努力のあとが深くしみこんでいます。今年、こうしたコトバをテーマに展示を組み立ててみました。木簡に記された文字から、万葉びとが語らったコトバの世界を垣間見ていただきたいと思います。

終わりに、ご後援いただいた関係各位に対しまして、厚く御礼申し上げます。

二〇二一年一〇月

独立行政法人国立文化財機構
奈良文化財研究所長

松村 恵司

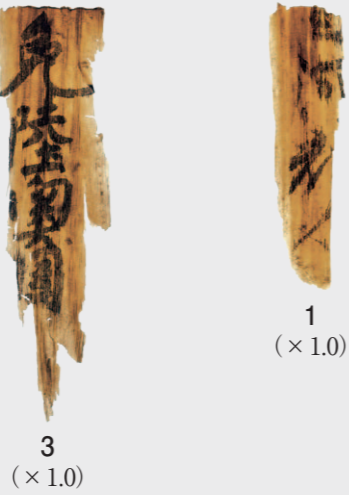
凡例

- 一、このリーフレットは、奈良文化財研究所平城宮跡資料館で行う秋期企画展「地下の正倉院展―コトバと木簡」にちなんで編集したものである。(会期二〇二一年一〇月一八日(火)―十一月二七日(日))
- 一、木簡の保存に万全を期するため、会期中二週間ごとに二回の展示替えを行う。
- 一、木簡の写真は、特に明記したものを以外は、原寸の七五パーセントに縮小して掲載した。写真下のアラビア数字は今回の展示における通し番号を示す。また、重要文化財指定品には、番号の右に○印を付した。
- 一、展示並びに本書の編集にあたっては、研究支援部連携推進課・企画調整部展示企画室の全面的な協力を得た。
- 一、本書の編集は、都城発掘調査部史料研究室の馬場基・井上幸が担当し、渡辺晃宏・馬場基・井上幸が執筆した。木簡の写真は、企画調整部写真室の中村一郎が撮影した。
- 一、今回の展示にあたっては、以下の諸機関のご後援を得た。記して謝意を表す。
読売新聞社・文化庁・国土交通省近畿地方整備局飛鳥歴史公園事務所・奈良県教育委員会・奈良市教育委員会・近畿日本鉄道株式会社・奈良交通株式会社・木簡学会

全国に広がる文字

奈良時代、支配の道具としての文字は全国に広まった。この文字の普及は、文化や人の交流をも支える存在でもあった。文字を背景にした巨大な交流と文化融合のネットワークは、遠く陸奥の国にまで及んでいた。

- 1 白河郡人と記された削屑。陸奥国白河郡出身者の人事評価関連木簡の削屑であろう。古代東北出身者が平城京で勤務し、全国への文字普及に一役買っていた証左の一つ。
- 2 陸奥国名取郡からの昆布の贅荷札。陸奥国の調庸物は多賀城に備蓄されるため、都で陸奥国の荷札が発見されることはまれ。贅とは天皇用の食材であり、この昆布も最高級品と考えられよう。遠く陸奥から、最高級の食材が平城京に届けられ、その繁栄を支えていた。
- 3 免陸奥国と記された削屑。内容は不詳だが、陸奥国に関する役割を解かれたことに関係するものか。東北と平城京にも、盛んな人々の往来があり、様々な交流があった。



1
(×1.0)

3
(×1.0)



2
(赤外)

2

コトバを漢字で

日本語をどうやって漢字で書き記すか。漢字を生み出した中国語と日本語では、発音も文法も異なる。古代の人々はさまざまに工夫をして、漢字という外国の文字を使いこなしていった。木簡はその様子を知る格好の資料である。



9



14



15



19



21



16

9・14・15 9と14は、漢文の語順でなく、日本語で読むとおりの順序で動詞を後ろに書く。9は「充飯六(四)升」、14は「塞御垣廡」と本来なら書くべきところ。木簡の書き手が、漢文ではなく、日本語として書き付けていることがよくわかる。

15はもう少し長い文章の例。「此を取る人は逃げる女と成る」とそのまま読み下せる。これは長屋王邸内の井戸から見つかったクジ引き札とみられる木簡で、後半部分を「御六世相」(弥勒の世にあうへ生まれ変わるの意味か)、「盗人妻成」(ぬすびとの妻となる)とする木簡も一緒に見つかった。

16・19・21 漢字を使いこなすには、練習が必要だ。そうした下級役人の努力がよくわかる木簡も多い。練習だからといって、意味もなく漫然と機械的に書いてばかりいるわけではない。木簡は彼らの心理やつばやきを読み取る格好の素材。

19は檜扇の骨に書かれたもの。「官」「宮」と間違えやすい字形の文字を練習したのかと思いきや、「中大式民治」と続く文字は、八省のうち中務・大藏・式部・民部・治部各省の最初の一字と一致する。最初の「官宮」も太政官・宮内省なのか、それとも「宮」を書いたところで、省名に連想が広がったのか。

21は、まず片面に「青」と「秦」を三文字ずつと「謹謹申」を書いたらしい。「謹申」は下級役人が日々書いていたであろう文言。裏返して心新たに「謹」を書いたところで、隣の異なる言偏の文字へと連想を広げていったのだろう。見慣れない文字もあるが、「論語」のように教養の見える隠れる部分もある。論語は千字文とともに、下級役人が最も慣れ親しんだ中国の書物。習書木簡にもよく登場する。

16は、散位寮が宿直担当者を報告する木簡の余白を使い文字を練習している。裏面にこの木簡の署名者と同じ「檜前舎人連」の文字を書く。自分が書き損じた木簡を習書に使ったのだろうか。



30 ○
(×0.7)



29 ○



25



23



27



26

29・30 習書が全面にわたる中に万葉仮名の文言がみえる木簡。29は「多可夜万^{〔乃九〕}」とあり、「タカヤマノ(高山の)」と読める。他に「為」の字などの練習をするが、裏面は木の割れた部分にまで習書されている。表面上部には鳥の絵も描く。30は「津玖余々美 宇我礼」とあり、「ツクヨヨミ ウカレ(月夜好み浮かれ、という意か)」と読める。元々「謹解 川口関務所」という過所(関所を通過するためのパスポート)の文言を書いた後、数度にわたり、表裏に「未」「皇」「讚」「雁」などの字を書き加えたもの。日本語の助詞や活用語尾までも書き表すことができるのが、万葉仮名で書く一番のメリットともいえる。

最近の各地の出土例により、万葉仮名で歌や散文を記すのは、今のところ七世紀半ばまで遡ることがわかってきた。ことに歌を記す木簡の発見が、難波宮跡、滋賀県宮町遺跡、京都府馬場南遺跡などで相次ぎ、従来から知られる難波津の歌の木簡や墨書土器の広がりとともに、木簡の万葉仮名表記は今広く注目を集めている。

【木簡に出てくる万葉仮名表記の例】

佐 米	サメ(鮫)
麻 須	マス(鱒)
伊 加	イカ(烏賊)
意 期	オゴ(おごり(海藻の一種)か)
伊 祇 須	イギス(いぎす(海藻の一種)か)
奈 須 比	ナスビ(茄子)
智 佐	チサ(チシャ菜)

漢字は、形・よみ方・意味の3つをあわせもつ。多くは、意味を利用して中国語のように書き表すが、時に、よみ方(音・訓)だけを利用する。例えば、阿や安をアに、伊や以をイにあてて、日本語の一つの発音を一つの漢字で書く。今のひらがな・カタカナの先祖の姿、万葉仮名だ。これで日本語を意のまま、話すまま、自在に書き記せる。万葉びとのこえが聞こえてきそうだが、当時の言語を知らない私たちには何を意味するのか特定しにくいこともある。

26・27 犬への飯支給に関わる木簡。長屋王家木簡。26「瘡男」、27「加佐乎」という人物が、支給された飯を受け取っている。

この「瘡男」と「加佐乎」は、おそらく同一人物。26は、漢字二文字の意味を利用した表記、27は漢字の読み方を利用した表記で、一音ずつ「加カ」「佐サ」「乎ハ」と読める。26だけでは読み方を確定しづらいが、27が「カサヲ」であることの証拠になる。

23 蔬菜類の進上や購入などに関わる木簡か。長屋王家木簡。「阿布比」と書き、「アフヒ」と読める。植物の「葵」をさすのだろう。他に「阿夫毘」と書く場合もある。これに対し、「葵」と書いた木簡もある。

25 若狭国遠敷郡青郷から送られてきた鱮の干物の荷札。「伊和志」と書き、「イワシ」と読める。これに対し、「鱮」と書いた木簡もある。

文字のすがたかたち

新しい文字のかたちを作りだしたり、書きやすいように書いたり、漢字を習得し、熟練しはじめた万葉人は、自在に使いこなしていく。当時のすがたかたちを留めた木簡には、活字からは知り得ない様々な情報がつまっている。



37○



38



42

37・38ともに若狭国からの「塩」の荷札。「国」「郡」「郷」「塩」という字を見比べると、形が異なる。木簡でよく使われる字なので、特に種類が豊富だ。それでも、その字として通用したようだ。

42「丹後国熊野郡田村郷」からの荷札。「刑部」の「部」の形は、現代と同じ「部」と書く場合もあるが、カタカナの「マ」や「ア」のような形もある。これは、「部」の旁「卜」を大きく省略したもの。七世紀には「ア」の形で書かれるのが普通だが、八世紀になると「マ」の形が一般化する。中国や朝鮮半島の影響もあるとされる。文字の形は、時代の流れをも伝えてくれている。

33 筑後国生葉郡から、霊亀三(七一一)年分の贄として貢進された煮塩年魚(アユ)の荷札。活字のようにかっちりとした楷書で書かれている。天皇へ贄を献上するという状況にもふさわしい趣である。

32 監物の史生等が酒を造酒司に請求した文書(啓<手紙のような文書>)。監物は監察や出納を掌り、庫藏の鑰かぎの授受を行う。

33とは対照的に、木簡表裏全面にわたって、流れるような行書風の筆づかいである。紙媒体の啓の類の文書では、他の文書と異なっている。このような趣のものが多いといわれている。相手に何かを伝えるために、書かれているすがたも大切にされている。

34 藁四十束を明日返すから暫く貸してほしいと伝える手紙の木簡。宛先は、「東宅司所(東宅の家政機関)」で、書き手は、大友真君(某官司の史生)。相手に最も伝えたい「藁冊束」をやや大きく、前後も空けて、きわだたせている。32と同じく流れるような筆づかいで、このような書きぶりは、古代の木簡では珍しい。



34

32

33



54○
(× 0.7)



49○



53



43



48○



45

書くものは一つもなく、あるのは「小」と「三」の二種類。しかも、今では「みつつ」と「まいる」のどちらの意味でも同じ「参」を用いるけれど、万葉びとは意識して意味によって字形を使い分けていたらしいことがわかってきた。

53・49の「参」は下半を「小」の字形、54の「参」は下半を「三」の字形で書いてある。これは、53・49の「参」がともに「まいる」の意味である(53は物品の付札なので、ものが「まいる」、49は寮庭に出向く指示の木簡で、ひとが「まいる」)のに対し、54は地名の参河(三河とも書かれる)で、「みつつ」の意味であることによる。

奈良時代の初めに少し例外があるだけで、この使い分けはほぼ完璧。こうなると、「参」と「叁」は、字形の違いというよりも、互いに意味の異なる別の文字の関係にあったとみた方がいいのかも知れない。

ところが、木簡や正倉院文書など、生の史料に書かれた「参」の字形をよく観察すると、下半部を「彡」の字形で

49・53・54 「参」(「参」という漢字には、日本語の「みつつ」と「まいる」の二つの意味がある。八世紀にも「みつつ」の意味の時は「三」を使うのが普通だったが、今でも領収書などの数字にわざわざ難しい「参」を書くことがあるように、昔も特別の場合には字画の多い「参」を使うことがよくあった。

と、ところが、木簡や正倉院文書など、生の史料に書かれた「参」の字形をよく観察すると、下半部を「彡」の字形で

43・45・48 男性名に広く使われたマロは、「麻呂」「万呂」「末呂」「萬侶」などさまざまに書かれる。しいていえば「麻呂」がフォーマル、「万呂」が日常用で、両者は混用される。また、「万呂」や「末呂」の場合、決まりきった二文字目の「呂」は、45のようにきわめて簡略に書いたり、43のように記号的に書いたりすることが多い。中には全く書かないこともある。

租税に付けられる荷札には、普通納める人の本籍地が書かれる。戸主・戸口など頻繁に用いられる文字は、本来はそれぞれ二文字なのに、48の「戸主」のように、一文字として書かれることがある。これを合わせ字と呼ぶ。ほかに「麻呂」を「磨」、「日下」を「早」と書く例などがある。

木簡から万葉歌をのぞくと



55

仏造る ま朱足らずば
水溜まる 池田の朝臣が 鼻の上を掘れ
(巻一六一三三四一)
(仏像を造る朱砂が足りなかったら、池田の朝臣の赤い鼻の上を掘ったらいよ。)

鼻の赤さを、「仏像用の朱が掘り出せるぞ」とか
らかう。仏像作成ということを考えると、この「朱」
は金メッキに用いる水銀の原料の可能性もあるう。
「からかう」ような軽い会話の中でも、「仏像―水
銀―朱」という連想が容易にできるのが、万葉びと
であった。仏像の造立や、そこでの原材料が、万葉
びとにとってはごく身近な存在だったからこそで
あろう。木簡にも、仏像や朱は登場する。

55 仏像の造立にあたった帳内と所に米を支給し
た木簡。



56

56 朱沙の進上を命じた木簡。ただし、この朱は絵
のための顔料であろう。55・56ともに長屋王家木簡。



57

(普酢に搗いた蒜を添えたタレで 鯛が食べたい。水葱の羹は、消えて欲しい。)
あこがれの「鯛」と現実の水葱の羹。木簡にもこれらの食材は登場する。ただし、蒜や
水葱は比較的少なく、鯛も加工品が多い。

57 酢の付札と見られる木簡。造酒司出土。造酒司では酢も醸造していた。

59 若狭国遠敷郡青郷からの鯛鮓(ナレズシ)の荷札木簡。

僧を戯り嗤ふ歌一首

法師らが 髭の剃り杭 馬繋ぎ いたくな引きそ 僧は泣かむ

檀越や 然もな言ひそ 里長が 課役徴らば 汝も泣かむ

(巻一六一三三四六三三四七)

(僧をからかう歌。お坊さんの、髭の剃り残しに馬をつないでも、強く引っ張ったらい
けないよ。お坊さんが泣いちゃうから。

僧が応える歌。旦那さんよ、そうおっしゃるな。里長が税の取り立てにきたら、あな
ただって泣いちゃうでしょう。)

杭につないでも暴れる馬、なんだか張り切っている里長。木簡にも、こうした人々の片
鱗がみえることがある。

60 近江国から藤原京へ向かう際の過所(通行証)木簡。下ッ道側溝出土。里長が署名・発行。
書式や記載内容などの点からも、注目される木簡。



60
(× 0.35)



70



68



67

兵衛府での宴席で、料理が盛りつけてあった蓮葉を題材に、兵衛が即興で詠んだ歌。蓮葉や兵衛は木簡でもおなじみの顔ぶれである。

68 片岡（現在の奈良県王寺町付近）から蓮葉を運んだ際の木簡。長屋王家木簡。

70 兵衛の召喚状。二条大路木簡。兵衛府ではなく、軍政全体を管轄する兵部省が呼び出している。



66



65



62



63

家にありし 櫃に鑱刺し 蔵めてし 恋の奴が つかみかかりて
（巻一六一三八一六）
（家の櫃の中に、カギを掛けて閉じこめたはずの恋って奴が、抜け出してつかみかかりてくるよ。）
 穂積親王は酔いが回ると、いつもこの歌を歌ったという。家で「封印」したはずの恋心がうずくとは、口説き文句か言い訳か。

62 カギの名前を記した木簡。カギを括り付ける穿孔はない。カギの管理に関わる札か。多数のカギが運用されていた様子が分かる。二条大路木簡。

63 折櫃の付札。折櫃は檜の薄板を曲げて加工した容器。内裏外郭北出土。同じ土坑からは、衣類を納めた櫃の付札も多く出土している。

（前略） 我が毛らは み筆はやし 我が皮は み箱の皮に 我が肉は
 み膾はやし 我が肝も み膾はやし 我がみげは み塩のはやし （後略）
（巻一六一三八八五）
（・・・私の毛は筆の材料、私の皮は箱の材料、私の肉は膾の材料、私の肝も膾の材料、私のミノ（胃）は塩辛の材料・・・）
 芸能者が家々の門で歌う「門付け」の一節。猟で殺されそうな鹿の言葉。鹿の利用を具体的に述べる。鹿は食材という側面も含め利用価値が高かった。

65・66 鹿肉の付札。65は干し肉。66もおそらく干し肉であろう。

67 阿波国（現在の徳島県）からの贄の荷札。「鹿薦」は「鹿薦纏」であろう。鹿を薦でくるんだものか。

ひさかたの 雨も降らぬか
 蓮葉に 溜まれる水の
 玉に似たる見む
（巻一六一三三八三七）
（雨が降らないかなあ。蓮の葉に水が溜まって、玉のように見えるのが見たい。）
 兵衛府での宴席で、料理が盛りつけてあった蓮葉を題材に、兵衛が即興で詠んだ歌。蓮葉や兵衛は木簡でもおなじみの顔ぶれである。